

SPARC Japan セミナー2024

「オープンアクセス義務化の先にあるもの:来るべき世界に向けて」

パネルディスカッション

池内 有為	(文教大学)
矢吹 命大	(横浜国立大学)
引原 隆士	(京都大学)
川島 秀一	(情報・システム研究機構ライフサイエンス統合データベースセンター)
高橋 修一郎	(株式会社リバネス)
瀬戸 寿一	(駒澤大学 / 東京大学空間情報科学研究センター)
北本 朝展	(国立情報学研究所)
武田 英明	(国立情報学研究所)
野末 俊比古	(青山学院大学)
竹内 比呂也	(千葉大学)



●池内 まず、前半の講演を簡単にまとめさせていただきます。最初に引原先生から、即時オープンアクセス(OA)の義務化が行われ、現状維持の状態からもう一度、自律的な学術情報流通を見直すチャンスではないかというお話がありました。即時OAは決してゴールではなく、そこから何を新しく生み出すかが大事だというのが本セミナーの趣旨でもあります。そのときに、データを公開して何になるのかという否定的な疑問が生まれるというお話もありました。

続く川島さんや高橋さんのお話には、そのヒントになることが出たように思います。例えば、ヒトゲノム計画からはたくさんのメリットが生まれ、ある程度までは予測されていましたが、AlphaFold2のようなノーベル賞級の素晴らしい成果までは、タンパク質のデータベースが開始された時点では予測し切れなかったのではないかと思います。しかしそれは間違いなくオープンデータあつての成果です。ヒトゲノム計画が始まったときには、必ずしも全員が賛成ではありませんでした。現在の即時OA義務化の状況も同じではないか

と考えました。

高橋さんからは、伝える仕組みということで、単に学術成果が公開されるだけではなく、きちんとブリッジコミュニケーションがあることで使えるようになり、フィードバックができるようになるというお話がありました。また、ブリッジコミュニケーションの発想で採択プロセスを設計したリバネス研究費では、採択された研究者が、後に研究代表者として獲得した研究費の総額が(2020年時点で)74億円と、これもまた事前には予測できなかった大きな成果だと思います。データや論文を公開して何かいいことがあるのかと考えてしまいますが、そこから予測を超える成果が生み出されるというヒントを頂きました。

瀬戸さんからは、地図情報の民主化ということで、災害時や緊急時の地図の重要性は日々実感していることですが、これを単にオープンにするだけでなく、教材や動画を作成し、参加者を増やすためのエコシステムを構築することによってコミュニティができているというお話がありました。今後の活動を考える上でヒ

ントになるご示唆を頂いたと思います。

続いて北本さんからは、データを生成・公開する人には、その使われ方が見えづらいというお話がありました。やはりデータの公開はゴールではなく、使われ方の見える化が重要であり、利用方法の汎用化における Mahalo Button の活躍と、Mahalo Button 自体が再利用可能で他のシステムにも導入できることをご紹介いただきました。

続いて武田さんからは、多様なステークホルダーが必要としている情報を回すためにどうするかということをお話いただきました。これは引原先生からお話があった、複雑に絡み合った問題を整理するという点ともつながると思いますが、永続的識別子 (PID) で整理することにより、多様なステークホルダーがそのデータを使えるようにするという非常に重要なお話がありました。

最後に図書館について、野末さん、竹内さんからお話を頂きました。野末さんは、情報リテラシーに関して、それ自体の DX、図書館の役割も変わっていくこと、利用者にリテラシーを教えるというフェーズから、AI を使いつつ、リテラシーがなくても使いやすい環境づくりをするというフェーズに移行していくことをお話くださったと思います。竹内さんからは、図書館はこの問題に取り組んできたものの、影響力が低く伝わっていないとのご指摘がありました。デジタル・ライブラリーの今後としては、オープンアクセス・オープンデータが原則であり、基盤を作ることで学術コミュニケーションを研究者の手に取り戻すということをお話いただきました。初心に戻って大事な話がいろいろ出てきたと思います。

ここから質疑応答に入りたいと思います。引原先生からお願いします。

●引原 一番多く頂いている『予算がつき、論文が通ようになったときは、全てが終わっている』とはどういうことか」というご質問にお答えします。研究者にとっては当たり前の話ですが、研究を始めるとき

には非常にピュアなモチベーションを持って、いろいろな勉強をして、予算の有無にかかわらず自分の考えに従って研究を始めます。それを論文化する、実験として形にする、データを取ることは、誰かに要求された行為でもなければ、研究費に対するエビデンスのためにやっている行為でもありません。

この経験を経ずに研究者になった人はほとんどいないと私は信じてきたのですが、最近の大学教育では、そこが少し欠落しているのではないかと思います。学生のときから大きなプロジェクトに組み込まれ過ぎて、「研究とはこういうものである」という形を先生に作られてしまいます。ですから、論文が通ったら終わりだという感覚がなく、そこから始まって次に面白い論文になりそうなものを探す人たちが多いのです。自分の持っている種を成長させるのではなく、どこかにあるものを自分の方に持ってくるというスタイルの研究が非常に増えているのが現状です。

しかし、現実には論文が1本出たら、その分野の答えは7〜8割決まったと考えるべきだというのが、私の経験的な考え方です。研究に大きな予算が付くと、そこから生じるのは予算の処理ばかりとなる。人を雇えば、その人が道に迷わないようにするにはどうしたらよいか、博士を採用したら、きちんと育て上げるにはどうすればよいかということばかりになってしまう。そうすると研究ではなくなってしまいます。これを、「予算が付く、論文が通ようになったときは、研究者としては全てが終わっている」という言葉に集約したということです。

●池内 ありがとうございます。それでは川島さん、お願いします。

●川島 ご質問を二つ頂いています。一つ目は「企業が独自に収集したヒトゲノム情報について、どのような管理規則・利用規制が存在するのでしょうか」というご質問です。申し訳ありませんが、私は（規則については）詳しくないため正しくお答えはできません。

ただ現状、ゲノム情報は日本においては個人情報保護法の中で「要配慮個人情報」とされていますので、データの取得・利用・提供に関しては提供者本人の同意が必要です。ゲノムに関しては特に「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」が厚生労働省から公布されています（2021年に廃止。同年新たに「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」が制定）。これは研究機関・企業を問わず適用される指針で、ヒトゲノムデータの収集・解析・管理などのルールを規定しています。ただ、法律に関わることで、具体的に何かされる場合はきちんと専門家に聞いていただく方がよいと思います。

もう一つが、「ライフサイエンス分野ではオープンデータが進んでいますが、他の分野でオープン化を進めるために何か参考にできることがあるでしょうか」というご質問ですが、その背景には何か分かりやすい理由があるわけではなく、たまたま歴史的な事情など複数の理由があるのだと思います。

ただ、ライフサイエンス分野にはデータベースを研究論文として投稿できる雑誌があります。昔はなかったのですが、データベースを作る人が増え、それを業績にしたいという要望を受け入れる学術雑誌が出てきました。論文が出るということは、業績が増えることです。論文にするにはオープンなデータベースでなければならないため、これは一つのインセンティブになると思います。

また、講演でもお話ししましたが、論文出版の際に付随するデータを公的データベースに登録することを義務づけているケースも多くあります。他の分野でどのようにそれを導入できるかは分かりませんが、義務があれば、皆さんデータを登録されると思います。ただ、正直に言うと、研究者としてはデータをオープンにすることは面倒な部分は多いのです。従って、ライフサイエンス分野であっても後回しにされがちではありますので、簡単にできる方法があるかといわれると、そうではないように思います。

●池内 ありがとうございます。なかなか難しいところはあろうかと思います。続いて高橋さん、お願いします。

●高橋 「今回の『即時 OA 義務化』の具体的方策では、『利活用の範囲に関するライセンス情報の明示がなくても無料でアクセスできれば対応 OK』とあり、利活用の点が軽視されているようです。ブリッジコミュニケーションに支障はないのでしょうか」というご質問を頂いています。これは難しいですね。これから次々にオープン化されコンテンツが増えていくと、相対的に状況が良くなるだろうという期待はあります。

一方で、オープンなコンテンツについて少し話を広げて解釈しますと、大学と研究機関が持っているコンテンツは、研究成果に限らないと思います。具体的にいうと、先ほど例示した「日本の研究.com」は予算が付いたプロジェクトについてですので、まだ成果は出ていませんが、より上流に行くと、「まだ予算は付いていないけれどもこんなことを思い付いた」というものもあります。実は社会・産業界が一番期待しているのはその部分です。予算が付き、成果が出て知財も自由がきかない状態で「さあ、どうぞ」と言われても、逆にコストがかかり、組み方を考えるのは難しいこともあります。大学の持つ広い意味での価値は、そういう仮説を続々と生むところだと思います。その部分での接点が生まれると、オープンなコンテンツにも深さが出るのではないかと思います。

現在、われわれは社会実験として、採択されなかった科学研究費助成事業（科研費）の申請書を集めるデータベースを作っています。府省共通研究開発管理システム（e-Rad）のeをリバネスのLに変えて「L-RAD」と呼んでいるのですが、産業界の方々からは、「一緒に組みたい」という声を頂いています。つまり、コミュニケーションの接点を少し上流に持つということだと思います。そのリスクは産業界も受け入れられますし、逆にそこを競争力にしたいという狙いもあります。アカデミアこそ、そのようなことが得意なのではないで

しょうか。

コンテンツという意味でもう1点加えます。近年、文部科学省が中学・高校の探究学習を強く推進しており、中高生の研究活動が増えています。それ自体は素晴らしいことです。（このような研究初級者に対して）図書館も含めて大学が貢献できるのは、倫理など、成果以外の部分があると思います。「研究とは？」という基本的なことを学ばずに興味関心だけで研究的なものに関わってしまう。例えば、論文との見分けもつかず、ウィキペディアから引用してしまうことがあります。もちろんウィキペディアは、彼らにとっては多くの情報を得られるソースだと思います。しかし、まずは学術情報の使い方の「いろは」や研究倫理といったところをベースとして（研究を）広げていくことも必要です。そのような工夫とセットにして支援すれば、オープンデータの真偽を見極めることが難しくなっている中で、広い意味でのリテラシーの向上に大学が貢献できるのではないかと考えます。

●池内 ありがとうございます。最後の中高生の研究活動には、オープンサイエンス、研究プロセスのオープン化も含まれると思います。リテラシーの観点から、野末先生、いかがでしょうか。

●野末 典拠を示す、ウィキペディアではなく論文を読む、文献はきちんと原典をたどる、といったことは、大学ではリテラシー教育として行っていますし、もちろん小中高校でも指導されています。ただ、なかなか徹底されていないのは、その理由がはっきりしないからだだと思います。

議論を盛り上げるためにあえて言うと、私はウィキペディアを使ってもよいケースがあると思っています。つまり原典にきちんと当たらないといけないケースからウィキペディアでもよいケースまで、研究や学術と呼んでいるものであっても、グラデーションがあるように思います。AI を使ってよいかどうかという問題も同じで、信頼性は50～60%だけれど、AI が言っ

ていることでいいねというケースと、典拠があって信頼性は100%ですよというケースがあると思います。つまり、求められる信頼性の度合いのようなものがあり、「ウィキペディアでもよいケース」をあえて指導することで、その違いが見えてくると思います。

●池内 ありがとうございます。瀬戸さん、データの品質管理の話も少し出ましたが、いかに更新していくかについて、いかがでしょうか。

●瀬戸 データの更新性、信頼性の向上という話で言うと、ウィキペディアに関しては「ウィキペディアタウン」といって、図書館などをベースとしながら、そこで信頼できる郷土資料を探し、記事に書かれていない情報を加筆するほか、場合によっては実際に現地にフィールドワークに行き確認した上で信頼性を高める素晴らしい活動があります。OA に引き戻して考えると、研究者やいろいろな機関が作ったデータをユーザーとしてよりよく使うことは必要ですが、いつまでも利用者（側）でよいかということもあります。学術情報にも容易な分野と難しい分野があるとは思いますが、データを作る側の立場として（OA に関する）活動に参加することも一つとなるのではと思いました。

そういう意味で、高橋さんがおっしゃった、OA のデータや研究業績がコミュニケーションの接点になり、いろいろな方がつながるという言葉に大変感銘を受けました。「無理やり感」や「やらされ感」を軽減することも一つケアとして大事だと思いますが、使い手だけでなく作り手の立場に立って、OA 化されたデータやコンテンツに触ってみる活動が、図書館や大学、研究機関でもっと進めていけるとよいと思いました。

●池内 大きなヒントを頂いたように思います。ありがとうございます。

次に北本さん、「機関リポジトリでの OA 化が本当にデータの利活用につながるのでしょうか。少なくとも自分の所属大学の機関リポジトリで何か情報（デー

タ)を得ようと思ったことはありません」というご質問を頂いています。これは特定の方へのご質問ではありませんが、ぜひ Mahalo Button などいろいろと工夫されている立場からコメントをお願いします。

●北本 難しいご質問ですが、情報を探すことと情報を使うことが混同されているように見受けられます。機関リポジトリにアクセスしてデータを得ようと思うことはないかもしれませんが、例えば検索エンジン等でリンクが示されればアクセスしてダウンロードするでしょう。今の時代、機関リポジトリが提供する情報検索手段を用いて、データを取得しなければならないという縛りはありません。

逆に言えば、いろいろなところからデータに到達するパスがあれば、さまざまな検索方法で見つかって使われる可能性があります。データが本当に使われるかどうかはデータの価値次第ですので、機関リポジトリに限らず、データがどこに置いてあっても変わりません。データの置き場という意味では、まさに「Findable (見つけられる)」の問題で、Findable となっていれば、データに価値があれば使うでしょう。ユーザーから見れば、データの置き場がどこであるかは重要ではないと思います。もし課題があるとすれば、機関リポジトリがグローバルに Findable になっていない可能性でしょうか。

もちろん、ランディングページで、データを使いたくなるような情報提供がなされているかという問題もあります。Mahalo Button はそこに貢献しようとするもので、データセットのメタデータを利用事例で拡張させるようなイメージです。メタデータとしてさらに豊富な情報があれば「使ってみよう」と思うかもしれません。ただ、メタデータを決まった構造できちんと書けば使いたくなるかというと、そうではありません。AI の時代には、メタデータの付け方も従来の定型なものから大きく変わることが予想されます。自然言語文でデータを持っていて、チャットで質問すると自然言語文で答えてくれて、その全体がメタデータにな

るという世界は十分に考えられます。そこに工夫の余地はあると思います。

●池内 武田さんからコメントをお願いします。

●武田 北本さんが指摘された Findable の点については、日本の多くの機関リポジトリが JAIRO Cloud、学術機関リポジトリデータベース (IRDB) を経由して CiNii で検索できるようになっていますので、知らず知らずのうちにリーチしている可能性はあります。実際、私は少しマニアックな研究もしており、関連する文献は紀要くらいしかありませんので、さまざまなリンクを拾って読んで役立てています。

グローバルに関しては、実は CiNii でもタイトルなどを翻訳して検索可能にする実験プロジェクトを進めており、意外と評判が良いのです。インターネットの翻訳機能などいろいろありますが、やはりそういうものを (整備して) 提供することには一定の価値があると思いました。

ですから、Findable に関しては、もちろん完璧ではありませんが、環境は整いつつあり、あとは中身だと思います。個人的には十分価値があるものと考えています。

●池内 Findable とメタデータの件はもう一つの大きな 이슈であり、今後の SPARC Japan セミナーのテーマにもなり得ると思いました。

Mahalo Button は、使い方が見られるという点で、初めてアクセスして使い方が分からない方には非常にリッチな情報だと思います。多くの利用者は、何かを調べるときに、まず Google で検索し、(検索結果に) ウィキペディアが表示されると、恐らくまずウィキペディアから見にいくと思います。ウィキペディアに学術情報をつなぐということに対してはいかがでしょうか。

●武田 実は、ウィキペディアに学術的な論文がどれだけ引用されているかについては、英語版ではかなり

調査されています。国内でも筑波大学の吉川次郎先生が調査されています。むしろ日本語版がプア（学術文献の参照記述が少ない）なのです。先ほどの瀬戸先生の「ウィキペディアでよいこともある」というのはそのとおりで、科学技術などに関してはウィキペディアの情報が一番詳しいということもよくあります。特に日本の研究者は、より積極的にウィキペディアに書いて貢献すべきです。実際にウィキペディアに書かれていることを引用はできますので、そういうものを評価してもらいたいくらいです。そこはわれわれも努力しなければならないと思います。

●池内 図書館員の方でもウィキペディアにひも付けることができるようになるといいですね。

●武田 メトロポリタン美術館などでは、職員がウィキペディアに書いています。これもコミュニティに対する美術館としての一つの貢献であるとして、職員がいわば業務としてウィキペディアの編集に携わっています。日本では、そういう話をついぞ聞いたことがありません。

●池内 実際にメトロポリタン美術館はそれでアクセス数が跳ね上がったことが分かっていますので、そういったこともこれから考えていけるといいですね。引き続き武田さん、ご質問にもお答えいただけますか。

●武田 私の講演では永続的識別子（PID）を強調していたので、「PID の普及に 10 年かかるのでは遅いのではないか」「PID の付与やシステムの維持にはコストがかかるが払えるのか」「PID は使いたい人が協力して構築していくもので、外からあれこれ言われることではないのではないか」というご質問を複数の方から頂きました。

ジャパンリンクセンター（JaLC）は、デジタルオブジェクト識別子（DOI）の登録機関（RA）を 2012 年から始めて地道に普及し、ようやく DOI を付けるの

が当たり前だと思われるようになりました。（国内での）最初の PID ですから仕方がないのですが、これに 10 年かかりました。やはり（定着するまで）時間がかかるのは事実です。また、JaLC を維持するためには、かなりの資金も必要で、現在は科学技術振興機構（JST）を通じて国の予算で維持しています。国としても PID を推奨し、義務とするかは別にしても、付与することが当然となるようにしてほしいと思います。もちろん PID システムを維持するためにはコストがかかることを理解して、国の方針にきちんと含めてほしいです。国の PID ポリシーをつくってほしいというのは、まさにそこなのです。草の根的に推進するのにはやはり限界があります。JaLC を普及するのに 10 年かかりました。10 年かかっていたのでは遅いというのは、おっしゃるとおりです。

ちなみに、英国は PID ポリシーを決めた最初の国ですが、どちらかというとコスト（削減）で行っています。PID を付けることによって学術界全体でいかにコストが削減できるか、例えば検索コストがどれだけ減るかというコスト分析を行って、英国全体でこれだけコストが減るから取り組むべきだとしたのです。日本の場合、そもそも（検索にかかるコストは）隠れたコストとなっていて積算もできません。英国は（日本の）1 周、2 周も先に進んでいます、日本はまだ「PID って何？」という段階ですので、コスト分析ができるレベルではありません。しかし、国として進めれば加速できると思います。「そんなこと言わずにやれ」「それは各研究者が意識するものだ」と言われればそのとおりですが、そうは言っていられません。そこを強く後押しする仕組みはあった方がよいのではないのでしょうか。

●池内 隠れたコストに、図書館がどれだけ貢献しているかを可視化できれば、今後、研究者コミュニティに対して図書館がこれだけのことをしているということを示す分かりやすいメッセージになると思います。続いて野末さん、お願いします。

●野末 「AI を活用した蔵書探索システムを使ってみました。興味深いです。これは、文献データベースにも反映し得るでしょうか。そうすると、従来のリテラシー教育がどのように変わっていくのか、もう少し踏み込んで伺えるとありがたいです」というご質問にお答えします。

データを何にするか、書誌単位を何にするかという違いです。今は取りあえず書籍・図書を対象としていますが、論文であっても大学のシラバスであっても AI 探索は可能です。実際に研究ベースでは進めています。ただ、そのままデータを入れ替えればよいわけではなく、(データに応じて) チューニングは必要です。他のデータベースベンダーやプラットフォームでも AI を使うところが出ていますので、今後さまざまな検索システムに AI が標準搭載されるようになるだろうと思います。

では、リテラシー教育はどのように変わっていくのでしょうか。AI については、過渡的ではありますが、ChatGPT なども含めて、AI は何を学習していてどのような振る舞いをするかという基本的なことは押さえておいた方がよいでしょう。文献・論文情報の検索について、図書館に少し引き付けて言うと、これからはツールベースでいろいろなことを考えるよりも、そのツールの持つ意味をリテラシーとして学んでいくべきだと思います。技術は次々に変わっていきます。今までは OPAC をはじめ、キーワードにマッチングするものを大量のレコードの中から抽出するというモデルでした。しかし、AI の場合は、入力したキーワードに近いレコードを順番に並べ替えます。つまり 10 万冊の本があれば、1 位から 10 万位まで順番に並べるという考え方なのです。ここを理解していないと、どんなときに OPAC を使って、どんなときに AI を使えばよいかが分かりません。このあたりもこれからのリテラシーになっていくと思います。

先ほど文脈依存性の話をしました。生データが次々に出てくると、分野によって使われ方・使い方が違うため、文脈依存性がますます高まっていきます。リテ

ラシーもそうなるでしょう。一方で、リテラシーで大事なのは技術への依存性を低めていくことです。ウィキペディアがまさにそうです。「ウィキペディアは使わない方がよい」というのは、もう少し敷衍すると、要するに責任を取る人がいないから使うべきでないということでしょう。小学校などでは、いまだに「インターネットで調べるときは公的機関の情報を使いましょう」「匿名のものは不適切です」などと指導しています。これもおかしい話で、例えば企業の内部告発は匿名だからこそ信頼性が高いということがあるわけです。また、公的な機関が正しいことだけを言うとも限りません(笑)。

つまり、信頼性について、形式的・技術的な側面だけで指導していくことはそろそろ古くなっており、それにどういう意味があるのかが大事なのです。「典拠を付けなさい」「出典を示しなさい」というのは、要するに書き手に責任を押し付けられるかという話です。「この人がこう言っているのだから、もしも間違っていたらこの人のせいだ」と言えるのが信頼性だと思います。80%くらいの信頼でよいのであれば、ウィキペディアでもよいかもしれませんし、先ほどのメトロポリタン美術館の話のように、「この人が書いているのなら 100%信頼できる」ということが求められるケースも当然あります。ウィキペディアが一様でないのと同じように、論文・文献も一様ではありません。技術への依存性をなるべく低めて、もう少しメタな視点でリテラシーについて論じていくことがこれから求められると考えます。

●池内 ありがとうございます。AI とリテラシーについては、まさに今から話が動いていくところだと思います。次に竹内さん、お願いします。

●竹内 私の発表に関わるご質問をたくさん頂いていますが、本日の議論を踏まえると、オープンアクセスやオープンサイエンスに関しては、研究者になかなか届かないということです。引原先生がおっしゃったよ

うに、「主体性を取り戻す」のは研究者であり、その研究者がクエスチョンマークを示しているのであれば、その横にいる図書館員がどんなに頑張っても動かないと思います。そうすると、OA が大事だ、オープンサイエンスが大事だという話を図書館が続けていることに、どういう意味があるのかと考えざるを得ないところは正直あります。

しかしながら、それで図書館が議論をやめてよいわけではありません。少なくともわれわれ図書館にとって、目の前にいるユーザーは大きなターゲットです。研究者だけでなく学生もいますし、教育という文脈も当然あります。また、次世代の研究者や次世代の学生もいます。このような大きな文脈の中でわれわれは議論していると考えざるを得ないと思います。

このことについては引原先生にお尋ねの方がよいと思います。これまでの環境を快適と思っている人に対して「それを変えてくれ」「このようにすべきではないか」と提案することは簡単ではありません。なかなかうまくいかなくても、ある程度、そういうものだと考える他はないと思います。

●池内 ありがとうございます。引原先生、いかがでしょうか。

●引原 竹内先生がおっしゃることはそのとおりだと思います。研究者というより、必要としていない人にいくら言っても釈迦に説法で無理な話です。例えば、ご質問の中に「グリーン OA に何の意味があるのか」というものがありました。これは、やはり手法と目的を取り違えているのだらうと思います。目的が明確にあって、そこにたどり着くための手法として今どれを選ぶかということだと思います。オープンにする意思があつて、資金があれば別にゴールド OA でよいというのは、それができる人たちはそれで構わない。それが社会への貢献であるという判断であれば、それでよいと思います。しかし、その考え方は全分野に通じるわけではなく、論文を公開するだけで精一杯というマ

イナーな分野は多くあります。ただ、「資金がないから OA 化はできません」ではなく、グリーン OA であれ、プレプリントであれ、別の手法でも構いませんので、研究成果を社会に還元することを真のゴールとすべきです。研究成果が蓄積することで、武田先生がおっしゃったように AI にかけていくということが当然のように起こります。現実には表に出ていない（データの）後ろの部分も AI が学習することもあり、OA 化していなくとも自身の成果が書かれているようなことが、正しいか否かは別問題として、起きているわけです。きれいごとですが、自分たちの成果を社会にどう還元するかが大前提であると思っています。

もう一つ、現在、研究者のコミュニティがバラバラになっている状況があります。研究者間でなく、研究者対出版社、研究者対レビュアーという形で分断が起きています。研究者コミュニティで議論して、よしとされたものを論文化しているにもかかわらず、レビュアーから「それはおかしい」と言われるわけです。これはコミュニティを崩壊させようとしているとしか思えません。違う世界の人たちが、産業に応用した例がない研究のレビューは通さないというのであれば、そのレビューには何の価値もありません。それを出版社が、価値があるかのように押し付けてきて、皆さんが受け入れているわけです。

従って、OA 化することによって、本来のコミュニティをきちんと維持することが重要だと私は考えています。先ほどの地図情報の話も同じで、データが公開されることでコミュニティが広がり、さらに上の階層の研究につながるのです。そちらに誘導していく方が、広く見れば、特定のステークホルダーの寡占を許さない世界になるのではないかと思います。

●竹内 類似の質問で、『学術コミュニケーションを取り戻す』『研究者の主体性を』というのは、研究者にとって研究以外の負担が増えるというようにしか聞こえません」というご意見を頂いています。引原先生がおっしゃったように、これは（学術コミュニケーション

ョンを) 研究者コミュニティに取り戻すということであって、個々の研究者が何から何まで全部しなければいけないということではありません。

さらに「OA 出版にせよデータ公開にせよ、図書館よりも出版社側の理解が深く、支援も厚いと思いますが、具体的に図書館は研究者に何をしていただけるのでしょうか」というコメントも頂いています。これに対してはなかなか答えづらいのですが、ただ、出版社のサービスが手厚くてよいと思っていられるのであれば、出版社が提示するさまざまなサービスに対する金額に対して、「高い」「払えない」とは決して言わないでほしいと、日ごろ出版社との交渉の前面にいる人間からは申し上げたいと思います。研究がうまく回らないほど雑誌の価格等々で困っているという研究者からの相談を受けて、図書館がフロントエンドでさまざまな提案や交渉を出版社と行っています。そこに対するリスペクトがないまま、図書館は研究者に何をしてくれるのだという議論は、関係性の崩壊をもたらす以外の何物でもないと思います。

●武田 私は図書館の人間ではありませんので、最後に取り上げられた「研究者の負担」についてお話しします。確かに今、特に若い研究者は非常に激烈な競争下に置かれており、次のポストを得るために論文を何本出したか、どこに出すのかに関心が向き、OA 化まで頭が回らないというのはよく分かります。そういう視点で見ると、確かに負担だと思います。そして、引原先生のように「まず理念から入りなさい」と言われても、近い将来の自身のポストがどうなるか考えて（不安になって）いる人たちには響きません。そこは、各分野のコミュニティ、学会を維持している人たちが意識を一層高めて、若い人たちのためにより良い環境づくりをしていくべきだと思います。

例えば J-STAGE は日本国内の学会のジャーナルのためのプラットフォームですが、CC BY が付いているジャーナルが少ない、要するにライセンスポリシーが付いていない論文が多いようです。JST は何度も説明

会を開催して啓蒙していますが、意識が非常に低く、反応してくれる学会は少ないようです。つまり学会が自分たちの問題として考えていないということです。

J-STAGE の論文のほとんどは無料公開ですが、フリーアクセスとオープンアクセスの違いを、学会を運営する人たちに理解していただけません。これが日本の学術界の一番のネックなのではないかと思います。

ですから、若い人よりも、むしろコミュニティを担う人たちに、もっとこういうことを理解してほしい、意識を高く持ってほしいと思います。せっかく国も義務化してチャンスをくれたのですから、次は研究者や研究者コミュニティがそれに対応しなければならないと思います。

●北本 オープン化に手間がかかることは理解できますが、これをコストと考えるか投資と考えるかでだいぶ意識が変わると思います。コストと考えると単なる手間ですが、投資と考えれば将来のリターンを期待してオープン化するわけです。資金に困ると投資する余裕がなくなり、コスト削減に目が行くのはよくあることです。日本の状況もそうかもしれません。ただ、オープン化すると引用が増えるという調査結果もあるように、これは将来に向けた投資なのです。最近話題になった中国の AI の DeepSeek は、別に誰かに言われたからではなく、戦略的にいろいろ検討した上で投資としてオープン化しています。そういうメタな戦略なしに、面倒かどうかという話をしても仕方ありません。私も答えはありませんが、考え方の転換が必要だと思います。

●引原 少し観点が変わるかもしれませんが、例えば STEM の分野では、データをオープンにしなければ査読にかからないということが普通になっています。数年内に STEM 系はそちらに移行し、大手出版社系はそのような方針になるだろうと思います。研究者にメリットがない、手間がかかるという話がありましたが、分野によっては、面倒くさいなどという話ではなくな

ります。

多くの場合、データを出版社などの商業プラットフォームに置いて、その先、データの所有権がどうなるかまでは認識されていないケースが多いです。現段階ではそこが曖昧なため、それを検証して、日本の研究者にとってよい形に落ち着かせる必要があると思います。ですから余計に、将来自分がメインで活躍するときにどうあるべきか、という形を皆さんがつくっていけばよいと思うのです。

ところが、「ストレージを幾らくれますか」「幾ら払わないといけませんか」と、費用の問題ばかり学内でも聞かれます。むしろ大学院生や若手研究者は、「将来伸びていく可能性を幾つか出してください、それをトライアルしてください」と言うのと、「分かりました」と言っている試してください。そうすると、論文はこちらに、データは CERN の Zenodo に置くなど、いろいろなことを試みて、どちらに置いても変わらないということも検証してくれます。

やはり、まだいろいろなケースがあるということを受け入れるべきではないかと思います。図書館の方は（保存場所は）「図書館でないといけない」と言う傾向がありますが、そんなこともないと思います。

●池内 ありがとうございます。重要な論点が二つありました。一つはマインドセットの部分で、負担と考えていたことを投資と考え直すということです。もう一つは、その具体的な戦略をどうするかというときに、図書館だけでなくいろいろな在り方があるのではないかということだったと思います。

ライセンスの話なども含めて、実際に使われるところでは戦略なりビジョンなりをお持ちかと思います。高橋さん、瀬戸さん、いかがでしょうか。

●高橋 今、議論を聞きながら混乱していたのが、図書館対研究者的な構図の話であるのか、それとも双方を含んだ大学（学術）という構図なのかということ。ビジネスに当てはめて考えれば、各大学がコンペ

ティターのようにになっている状態ですから、何を主語にして戦略を練るのかによって議論は変わってきます。会社で言えば、例えば社内の営業が「お客さんがこう望んでいるから、そのためにこういうことをやりたい」と言えば、開発部門は「よし、一緒にやろう」となります。ですから、どのような主語で考えるかによって随分変わってくると感じました。

では、産業界がどういうものを期待するかというと、実際、論文や特許やデータに加えて、「人」を見ることが多いのです。なぜならば、その情報がないからです。「日本の研究.com」にも人柄は載っていません。挑戦的な研究開発に一步踏み込むときに、人の要素が作用することはあるように思います。私どもリバネスグループは大学発ベンチャーへの出資も行っていますが、技術やビジネスモデル以前に、「人」の要素が実は非常に大きいと考えながらお話を聞いていました。

●池内 その「人」を探すときには、研究者であればやはり論文やデータが糸口になるのでしょうか。

●高橋 もちろん、論文やデータも見ます。それこそ「日本の研究.com」や論文のデータベースも見ますが、信頼している先生に「この分野の知り合いはいませんか」とお聞きすることが多いです。というのも、ベンチャーの人間も大学の先生も、よい意味で個性が強いのです。ですから、人柄の良し悪しという話ではなく合う合わないの問題だと思います。その情報がすっぱり抜けているのが現状です。しかし、新しいチャレンジなところで組んでいくときには、合理的な計算の結果として組むのではなく、その先に失敗しても、「一緒に頑張ったけれどできなかった、仕方がないな」と気持ちを納得させるための準備の部分、あるいはやってきたプロセスに価値を見出せる部分に割と「人」の要素があるのです。それはどうしても可視化できませんし、その物差しは一律ではありません。だから面白いと思う一方で、もし合理的な答えを導くデータベースがあったとしても、機能しないだろうという直観

を持っています。

●池内 それに対して、図書館なり研究者なりに何が
できるかという難しいのですが、オープンサイエ
ンスの効果の一つとして、共同研究や産官学の連携を目
指されているので、そういう視点も大事になると感じ
ました。

●高橋 そうですね。できるだけ若いうちに他のセク
ターの人と組む経験は積んだ方がよいと思います。私
たちの研究費もそういう経験値になればよいと思っ
ています。採択する側もいろいろな会社の経営者の方々
でするので非常に多様で、オーナー企業の社長が「あの
研究者は興味深いな」と一存で採択を決めてしまう場
合もあります。全く合議制ではないですが、公的資金
由来ではないためそこは自由です。そういう多様な目
が、産業界、社会の側からも広い意味での学術に入っ
てくるとよいと思います。そして、できるだけ若いう
ちに、自身が取り組みたい研究の文脈で、掛け算とな
るような思考を回す経験を積むと、自分と相手が求め
るものを自然とブリッジできるマインドセットができ
ると思います。

その目線で、図書館の方とどのようにチームを組ん
で価値を出すかという際に、図書館は一般の人でもイ
メージがわきやすく、大学の中では非常にインターフ
ェースになり得る場所だと思います。

●池内 そこは図書館の強みですよ。

●高橋 そうですよ。図書館というビジネスモデル
を考えてみることは、一つヒントになるのではないかと
思いました。

●池内 大変貴重なコメントをありがとうございます。
瀬戸さんはいかがでしょうか。

●瀬戸 私の中でまだ整理がうまくできていないので

すが、お話を聞いていて、自分事としても非常に大事
な論点だと思いました。

私自身、2021年に今の大学への採用が決まりました
が、それまでは任期付研究者でした。私なりのサイエ
ンスコミュニティでの活動を振り返ると、論文を出し
て専門分野の採用を目指すことは行っていましたが、
それだけでは研究者として足りないのではないかと以
前から強く感じていました。そこで自分自身の興味関
心もあって、OpenStreetMap (OSM) の活動を、当初
は研究者である前に個人として始めました。同じ時期
に、オープンソース開発の GIS コミュニティにも 15
年近く、ライフワークとして関わっています。そのツ
ールが自分の研究で使えるかはさておき、面白いツ
ールだから日本語化してみよう、あるいはソースコード
を少し改善してみようという活動をしてきました。オ
ープンソースコミュニティがすごいと思うのは、フリ
ー&オープンソースが活動の共通言語となっており、
ソフトウェア開発のみならず、ドキュメント整備など
さまざまな形で活動が盛り上がっているというこ
ろです。

OA に即して考えると、論文は J-STAGE やいろいろ
な学会誌に書きますが、それだけでなく、データセッ
トは (使いやすい) 別のリポジトリで公開する、ある
いは開発に関わったソースコードを GitHub などに残
すといった、多様な手段・方法が可能になりました。
かつて、アカデミックコミュニティの中では論文を読
んでくれた方や、指導教員の知り合いなど個人的な付
き合いの中で私を知ってくれる方が多かったのですが、
自分が公開したデータやプロジェクトを介して知って
くれて新たな共同研究者が見つかるというケースを実
際に経験しています。(研究成果を発信する) インタ
ーフェースとしてリポジトリやデータベース、プラッ
トフォームがあることを知ったのは非常に大きいです。
私はもはや若手という年齢ではありませんが、今の若
手研究者の多くが、現在そうしたマインドを持ってい
ると思います。研究室での取り組みをいかに可視化で
きるか、大学という組織の中では大学図書館が、研究

者とともに可視化する取り組みができるか、研究成果を魅力的に世界に露出できるかは、大きな挑戦でもあります。チャンスの一つではないかと思います。

最後に、研究者コミュニティあるいは大学の学生との接点という意味でも、大学に図書館という場があることは、本来は大きな強みだと思います。本日のお話を聞いて、今までは蔵書や大学が持つ研究資料などの資産の管理が主軸と捉えていましたが、そこから、アウトリーチも含めて、(研究資源として)何をアウトプットしていけるかという点でも、できることはあるのではないかと改めて思いました。私自身いつもは利用者側という位置付けですが、今回の議論を踏まえて、大学図書館と研究者・学生で何かできるのではという視点は、もっと自分事としても考えたいと思います。

●池内 図書館もずっと「場としての図書館」という議論はしてきたのですが、どちらかというと、デジタルなコンテンツに移行すると図書館に人が来なくなるという文脈で言われていました。高橋さんと瀬戸さんのお話からは、論文やデータがあるだけでなく、館があることで人を物理的に集められる、人と人とのつながりの場所として再度図書館を利用するという新しいストーリーを頂いたように思いました。ありがとうございます。

●矢吹 だいぶ議論が発散し、煮詰まってきたように思いますが、皆さまに伺いたいことが一つあります。「OA が義務化されましたが、どうすればいいですか」というご質問がたくさんあったように見えますが、一方で、義務化されたから、やらなければならないからやるというロジックだけで進み続けるのは、さすがに寂しい話です。より前向きにこれに取り組みたいと思う動機は、どこから来るのでしょうか。

瀬戸先生のご講演を伺って、オープンソースコミュニティの話とも重なりますが、あのように基盤データとしての地図データをボランティアに作っていくことが継続するのはなぜなのでしょう。それは、研究者

がデータをオープン化することとも通じるように思われます。特に、コストと考えるか、投資と考えるかは一つの考え方です。投資だと思っても、直近でコストが発生することは間違いないわけで、ある種の痛みを飲み込んで進んでいくときに、どのような考え方があるか。大変曖昧な問い掛けですが、やらされ仕事ではなく、乗り越えてオープンにしていけることにつながるための考え方、姿勢について、改めて伺えればと思います。

●引原 全体としての OA の捉え方ということだと思います。予算を頂いて処理しました、義務化を果たしました、オープン化しますというだけでは寂しい。それは当たり前です。しかし、そうしないと動かなかったというのが現状だと思います。

初期値を与えていただいた上で、向かう先を図書館の人に考えさせるというのは、私は違うと思います。それはやはり研究者が考えるべきです。分野によって色合いが違い、地球科学分野や宇宙物理分野ではオープン化が当たり前になっていますし、ゲノム系もデータの登録が OA 化の義務となっています。化学系でもそういうケースが多くあります。既にムーブメントが起きているにもかかわらず、一律に大学や評価機関が論文のインパクトでしか評価していないことが問題なのであって、他の多様な尺度を示していくことがこれから始まるのではないかと考えています。

それを図書館、あるいは図書館だけでなく学内の研究推進系の部署、評価の部署などが従来の考え方の中でデータを見て、処理・評価するのではなく、大学としてどう見せればよいのか、どう見えるのかということ、データを基に議論する場にさせていただくのが最善だと思います。

助成機関もそうです。自分たちがきちんと仕事を果たしていることを示すために「研究者がトップ 10% の成果を出しました」のようなことを一生懸命発信しているからこのような状況となっているのです。個々が自身の最適化をして何かをアピールをするからおか

しいのであって、全体としてどう見るのかということ
をきちんと議論しなければ、資金がどこかに流れてい
くという構図がいつまでも消えずに続くのではないか
と思います。

●川島 元々のご質問は、オープンソースの痛みをど
う乗り越えるかということでしょうか。

●矢吹 それは言葉のあやですが、やらなければなら
ない状態になって始めたというのが、現在の（多く現
場での）状況です。ただ、元々進めてきた人たちは、
既にオープン化しています。その立場としてでも構い
ませんが、なぜオープン化を続けているのでしょうか。

●川島 ご質問に違和感があつたのは、私も瀬戸先生
と同様の感じを持っていて、GitHub にプルリクエス
トを出したりコミットしたりするのは、単純に楽しい
からです。論文とは少し違いますが、やらされている
ケースはまずないと思います。恐らく、承認欲求や自
己顕示欲もあるからです。また、若い人は特に多いと
思いますが、単純に GitHub に良いコミットをし続け
ている人は絶対に評価され、就職にも困りません。も
ちろん金銭面だけではありませんが、皆さんから評価
される、だからやりたいのです。

研究分野の性質上、私も GitHub を使いますし、オ
ープンデータも出しますし、ウィキペディアにも書き
ます。GitHub は本来、情報系に特化したツールでは
ありませんので、人文科学系の人も積極的に書いてコ
ミットすればよいのにと素朴に思っています。で
すから、何が問題となっているのか疑問で、先ほどの
アカデミックの中での大学と図書館の対立というこ
とも、いまひとつよく分かっていないのかもしれない
あまりお答えになっていないのですが。

●矢吹 単純に、やったらみんな褒めてくれるのだから、
やればいいではないかということだと思ふのです。

●川島 それはあります。今はインターネット上で公
開するとフィードバックは速いです。よいことをして
いれば、それこそ GitHub に何か置いたら海外からす
ぐにコミットしたりプルリクエストが届いたり、反応
が速いのです。だから、やりがいがあるのではないか
と思います。

●竹内 今のお話を伺って強く感じたのは、図書館は、
国の制度を守ってきちんと運営していこうというメン
タリティが非常に強いところだということです。とこ
ろが、それは研究者のメンタリティとは合わない。そ
の矛盾があるにもかかわらず、ある部分では図書館が
しなければならないという議論が出て、しかしやろう
とすると、なかなか研究者には受け入れられないとこ
ろがある。引原先生がおっしゃったように、これはた
だ従うということではなく、研究する人にとってプラス
になる環境をつくるための議論のきっかけに過ぎない
と思います。制度としてあるから大学で対応しなけ
ればならないのですが、研究者から見れば「図書館に
やらされている」という意識が出てしまいます。本来
は協力していろいろなことができるにもかかわらず、
うまくいかなくなる。研究者からすれば「何をやって
くれるのだ」、図書館からすれば「なぜこれを理解し
ていないのだ」という認識の違いから不毛なコミュニ
ケーションとなってしまう。そういう構図ではないか
と思います。

●矢吹 図書館側は（国から）「やれ」と言われたか
ら（研究者に）持っていくと、「なぜやらないといけ
ないのだ」と返されて、どう説明すればよいか堂々巡
りとなってしまうということでしょうか。私も図書館
の人間ではありませんので、「ではない」立場から伺
っています。一方で、民間のお立場からすると、先ほ
どのお話の中にエッセンスがありましたが、こういう
議論が役に立つという部分もあると思います。高橋さ
ん、いかがでしょうか。

●高橋 役に立たないことはもちろんだと思いますが、私は今、即時 OA 化を誰が決めたのかということから調べているくらいの素人ですので、論点が全くずれていたら申し訳ありません。お話を聞いていると、図書館の人はただ間に挟まれているだけで、別に自分たちで決定してやっているわけではないのに、そこに不満が向かっているという状態だと思います。一方で、公的資金で動いているものだから、その成果は広く国民に還元されるべきであり、(還元方法として)それが一番分かりやすいのは成果のデータを OA 化するという構図なのだと思います。その途中途中で図書館の方が、誰もが納得できる形で研究者にサービスを提供するのは難しいのではないかと思います。公的資金(による研究成果)だから成果を公開するというロジックが通るのならば、これまでやっていなかったのを変えようという話です。さらに言えば、研究者は直接的な研究活動だけ行えばよいのかも含めて、何をもって研究というのか。社会・国民の理解増進まで含めて研究だと考える、あるいはそれが公的資金を提供する意味だというならば、「それはきちんとやろう」の一言となってしまいます。

●矢吹 結局、これは研究者の規範的な問題であって、当然やるべき話だということに着地するのですね。

●高橋 そうですね。全体としては、義務なのだしやらねばという状況なのだと理解しました。ただ、少し変化球を投げると、資金提供を受けたら実行できるし考えられるという話であれば、そもそも、最も研究で価値がある部分である最初に仮説を考える資金は誰も出していないではないか、むしろ学費で自分が出したじゃないかという話になってしまいます。科学研究費助成事業(科研費)の採択率は応募件数の 2~3 割程度ですので、現在支援を受けている仮説(研究課題)に対する説明責任は果たしつつも、研究活動の中で生まれたプラスアルファのアイデアを次に生かすことが大切だと思います。

例えば、図書館がその大学の(科研費の)不採択となった申請書を全部まとめたとしたら、その積分値たるや相当な量となります。そして、「産業界と積極的に組みたい人がいます。守秘義務を結ばば、不採択の申請書がここで密かに見られますよ」と言えば、多くの産業界の方が来ると思います。

●矢吹 私は肩書の一つがリサーチ・アドミニストレーター(URA)ですが、まさに研究推進支援を担う専門職の部隊がそのようなところに目を付けています。おっしゃるとおりだと思って伺っていました。

●瀬戸 今のお話につなげてお答えします。1 人なのか、チームあるいは大学全体の組織を巻き込んできちんと取り組むのかという違いもあると思います。

私の所属は文学部ですが、私自身は地理学・GIS 研究ということで、半分理工系のマインドも持って研究をしていますので、どちらの言い分も分かります。普段、いろいろな共同研究や学外での交流が多いですが、基本はほぼ 1 人で全ての事務やデータの処理、論文執筆などを行っています。このような環境で義務化という話が来ると、オーバーフローするという意見は当然出てきます。

一方、大学図書館だけでなく産学連携に関する部局や URA のように、研究者あるいは大学外の人々を円滑につなぐハブが徐々に増えていると思います。このような組織が一丸となって、OA についてどう考えていくべきなのか。あるいは、やらされていることが前提にあるかもしれませんが、引原先生のお話のように、どうしたいのかがいまひとつ伝わってこないと思います。そして大学教員側もどうしたいのかを誰にもきちんと伝えていない中で、4 月からの(即時 OA 義務化)開始が目前に迫っている状況だと理解しました。

逆に考えると、大学や研究機関として、どのようなデータが出せると大学の特色としてユニークかということ自体、本来は各大学・各図書館・各研究機関の創意工夫によっていろいろなパターンが考えられると思

います。本来、一丸となっていくべきであるにもかかわらず、そこが今、個別機関の競争になってしまっている分、オリジナリティを最も出せるはずなのに、凝り固まってしまっているのではないかと思います。

OSM の活動は、必要だからではなく楽しいからスタートした部分もあると思います。日本の場合は、活動が活発な地域と比べて関わる人はまだ圧倒的に少ないのですが、あまり考えなくても地図が使える環境が既にあります。一方、途上国などでは地図が自由に使えない国も多くあります。地域研究をするときに、そもそも地図を入手できないために自分たちで OSM のデータを作らないと現地調査ができないということもあります。OA 等を考えるときに、今はデータの入手が困難だが、データがシェアされるようになれば研究が進む分野があれば、大きなブレイクスルーとなる可能性すらあると思います。やはり研究組織が一丸となって指針や方向性を考えていかなければならないのではないかと思います。

●北本 無責任な言い方かもしれませんが、やはり図書館は損な役割を負わされているような気がします。本来は、研究者が義務化に対応しなければならないはずが、図書館が義務化を担うという形に変わってしまっています。図書館がオープン化のセールス部隊として、研究者に盛んにセールスする役割を担わされているように見えます。

先ほどコストと投資という話をしましたが、投資商品を無理やり売り込むと、「絶対に損をしないのか」と聞かれます。「絶対に損をしないとは言えませんが、将来きっといいことがあります」「いや、損をしたくないから嫌だ」と、そんな会話に聞こえるのです。実際には、損をすることもあるかもしれませんが、大きなリターンが返ってくることもあるわけです。

もしかすると図書館には別の可能性があったのかもしれませんが。研究者が OA 義務化に困って、図書館に「どうしたらいいですか」と相談に行くと、図書館はコンサルタントのように「こんな方法もありますよ」

とアドバイスするという世界です。しかし、現実には売り込み部隊となってしまっています。

こうなってしまったのは、今後の図書館のビジネスモデルを考える際に、結果的にセールス部隊に組み込まれるようなモデルを選んでしまったからなのかもしれません。しかし、売り込みという立場はやはり辛いでしょうから、コンサルティング的な役割に移れるような道を探して、(研究者に) 選択肢を提示する。そういう道があるのか分からないという意味で無責任な発言かもしれませんが、そういうところで何かできればよいのではないかと思います。

●武田 即時 OA 義務化は決まったことですので、理由を問われればもちろん答えるべきですが、それになぜわれわれ研究者は従わなければならないのかというクエスションはもうナンセンスになっています。取りあえず、そういうルールなので従ってくださいということです。

ちなみに、今、OA 義務化は科研費を含めて 4 事業だけですが、長期的・世界的に見れば、国立大学の教員は成果の OA 化を求められる時代はいずれ来と思います。それは、国の予算を使っているからです。私立大学も国から補助金を得ていますので、その可能性はあります。そこで義務化の理由を問うことには、あまり意味がありません。

あとはどう実施するかという問題です。それをどう個別の研究者が理解して自分に役立てるか。最初の質問はそこだと思いますが、分野によって違いますので、各自でいろいろ考えてくれたらよいと思います。オープンソースが当たり前の分野であれば、同じコンテキストで、OA 化も同じだと思えばよい。逆に、例えば 100 年、200 年と残るような歴史を研究する分野であればアーカイブ的にすべきだと思う人もいでしょう。あるいは、オープン化がすぐわない分野は、いかにオープン・クローズ戦略を練り直すか。それは義務化する条件がある上で、各分野で考えるべきだと思います。

最後に図書館の関係についてです。まず OA 化の一

番の責任を負うのは本来、大学でいえば研究推進の部門のはずです。そこがまずは基本で、大学の方針を定め、その実施の上での図書館の役割を位置付けるべきであって、図書館が旗を振るのは確におかしな話です。研究推進部門が大学としてどのように成果を公開するかを位置付け、論文なら図書館、データならデータセンターで相談しなさいなどと仕分けるべきです。そう考えると図書館が最前に立つのは違うように思います。国も OA 化を推進する中心はどこなのかについては言及していません。今から考えると、そこまで言うべきだったように思います。

●野末 私は教育分野の出身ですので、少し視点を変えて 1 点だけお話しします。大学に限って言うと、大学の役割の一つは研究、もう一つが教育です。教育においては、言われたことをできればよいわけではなく、研究能力、学術的スキル、論理的思考といったものを身に付けて巣立っていくことが大事です。教科書的なものに加えて、今までは触れられなかった生のデータ、論文などがオープン化されて、教材として使うことができれば非常に意味があると思います。OA 化は義務ですが、実は教育のためでもあります。

これを広げて考えると、今、国の施策として、小学校から高校まで「教科書だけでは学ばない」という流れになっています。もちろん、研究活動の細かいところまでは、児童・生徒は理解できないかもしれませんが、生の研究の素材を使って学ぶ環境が整うことは、社会的に見ても非常に意味があることです。教育的な観点からも意義がありますので、「面倒くさい」などと言うのではなく、取りあえず表に出そうということだと思います。

●竹内 オープン化自体は、図書館が本来理想とする、誰もが無料で必要な情報にアクセスできる環境をつくるための非常に大きな手段ですので、図書館は決してそのこと自体を否定しているわけではないことは、まず申し上げておきます。環境が動いていくことは、こ

れまで図書館がこうありたいと考えていたことに明らかに近づく一歩だと思います。

ただ、国の義務化の要請の中で、各研究分野のユニークさや違いがうまく吸収される場所がないため、一律のルールで全てをコントロールしようとするところにさまざまな矛盾が生じている。高橋さんがおっしゃっていたように、その間に図書館が挟まれている状況にあるのだと思います。ですから、何が皆にとってよい形なのかを少しずつ議論を重ねて動かしていくことが重要です。これは、図書館だけ、研究推進部門だけ、情報基盤部門だけではできないと思います。

ご質問に、「この三者がどのように議論するのがいいのか、なかなかうまくいかない」とコメントをいろいろと頂きました。うまくいかないと考えるべきか、それとも、そういう分け方そのものがもはや時代遅れになっていると考えるべきか。大学の組織の在り方として見直さなければならない時代なのではないかと私は思いました。

●矢吹 結局この問題はどこかで毎度考えて、自分なりに考えがありつつも、「こうも考えられる」「ああも考えられる」という多様な材料があると視聴者の皆さんにもプラスになると思って、非常に雑な形だったのですが質問させていただきました。私自身、大変勉強になりました。

一方で、北本先生からあった、怪しい投資商品を買っているような状況だというお話は非常に納得するところがあり、自分の中でももやもやしていたのはそれだと思うところがありました。学内の先生方からご相談いただいたときには、本来はコンサルタントのように、幾つかのオプションを示せる側になればということに常に考えてやっているつもりではありますが、それが非常に明確化できたと思います。先生方、ありがとうございました。

●池内 時間の関係で全てのご質問にお答えできなかったことを深くお詫び申し上げます。本日は、いろい

ろなヒントを頂くことができたと思います。これでパネルディスカッションを終了します。ご登壇者の皆さま、ありがとうございました。